

# まんだら通信

第180号(通巻211号)

平成23年(2011)06月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 『有難う、台湾』

この『まんだら通信』一七七(三月)号『ボサツの心』で、日本に心を寄せている台湾人がとても多いことを書きました。  
『まんだら通信』の発行日は毎月十日ですが、翌日、三月十一日に千年に一度という『東日本大震災』が起きました。  
その日の午後八時、台湾の李登輝元総統は、世界に先駆けて次のようなメッセージを発表しました。

日本の皆様へ

日本観測史上最大の「東北・太平洋沖地震」の発生をテレビで知りました。

津波で押し流された家や車、そして、火災、家に戻れない方々。亡くなった方



もおられます。次々報道される災害状況を見て、一九九九年九月二十一日、台湾で起きた大地震を思い出すと同時に、現在日本の皆様の不安や焦り、悲しみなどを思い、私は刃物で切り裂かれるような心の痛みを感じております。

人間には力の及ばない大自然の猛威の前に、畏敬の念を抱いても、決して「運命だ!」とあきらめないでください!元気を出してください!自信と勇気を奮い起こしてください!

今は、一刻も早く地震の余波が収まることと復旧を、遠い台湾の空の下でお祈りしております。

台湾元総統 李登輝

二千一十一年三月十一日午後八時

というお見舞いのメッセージを発表しました。  
台湾はまた、世界に先駆け救援隊二八人を派遣してくれました。

更に、「日本を救おう」という声にこたえて、マスコミや口コミで政府民間合わせて、五月末現在百七十億円という途方もない義援金が集まったということです。

台湾の人口二千三百万人という規模から考えて、いかに大きな金額かということが分かります。

アメリカは「トモダチ作戦」といって、航空母艦や駆逐艦、上陸用舟艇、特殊部隊、大型土木機械など最先端の力で援助してくれました。

フランスも原子力関係の専門家を派遣しましたし、ドイツ、イギリス、フランスほか世界百三十四の国や地域から、救援隊や義援金が続々と送られました。

その中で、経済力や人口など国の力を較べれば、台湾の人たちの日本への思いは、恐らく

世界一といって間違いのないでしょう。

日本政府は震災から一ヶ月経った四月十一日、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国、韓国と国際英字紙インターナショナル・ヘラルド・トリビューンの七紙に、感謝の広告を掲載したのだそうです。

百三十四に対して、たったの七つでは、援助の気持ちに対するお礼としては、情に欠けると思うのは私だけではないでしょう。

果たして、台湾の人たちにお礼を言いたいと思つた川崎市のデザイナーさんがインターネットで呼びかけたところ、六千人から千九百三十万円も集まってしまったそうです。

そのお金で台湾の全国紙『自由時報』と『聯合報』に「ありがとう、台湾」という日本語と「愛情に感謝します。永遠に忘れません。」という中国語の感謝の広告を掲載したのだそうです。

この広告を見た台湾政府の福永明新聞局長は、「お礼を期待したわけではないが、みんな感激している。」との感想を発表したということです。

広告代は二百四十万円。

残った分は日本赤十字社に寄附したそうです。

本来なら日本の政府がすべきことですが、この人たちが日本の品位と信用を守ってくれたことに感謝する、と産経新聞の編集長さんが書いています。

さすがに政府もまずいと思つたのか、五月十一日現在で六十四カ国の新聞にお礼の広告を掲載したとのことですが、こんなこと、人に言われる前にするのが当たり前だと思うのですが如何でしょうか。

余談です。

先日国会で、自民党の山谷えり子さんが「今上天皇は何代目かご存知ですか」と聞いたところ、官房長官は「存じません」と返事したそうです。こういう小学生並みが内閣の女房役とは、と思つたら悲しくなりました。

◆つい昨日、先月号を書いたように思っていました。1ヶ月って早いですね。◆上の写真は、先月22日香取市弁島のスリランカ寺、蘭華寺でのヴェサック祭りのコマです。

アンギラさんもいますが、マハー・ボディ・ソサエティ(大菩提会)の管長バーナガラ・ウパティッサ僧正や、とても気さくな駐日大使のワサンタ・カラナーゴダさんなど錚々たる人たちがお集まりでした。宗教をととても大事に思うスリランカの人たちですから、お国のお寺があることで、随分心強いことだろうと思ひました。

司会はテレビの英会話で有名だった、アントン・ウィッキーさん。

◆7月は、東京や横浜などのお盆ですね。せめて年に一度はご先祖にお経を、と思っている方のために毎年伺っています。「そう言えば、来てもらったことないなあ」と思ったら、間近かにならない内にご連絡下さい。

◆上の余談の続きです。自国の歴史・宗教など文化の素養は、ユーモアとともに、「偉い人」が身に付けるべき必要条件ですね。皇居への参内は、外国の要人が一番誇りにすることだそうです。

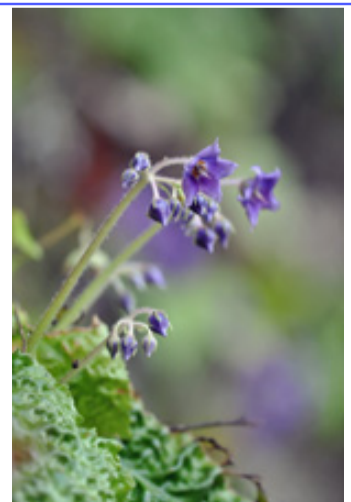
一つの家系が2,300年近く続い

ている王室は世界広しといえども日本だけ、ということを知っているからです。運悪く外国人に聞かれて「125代です」と言えなければ、この「偉い人」は日本の名誉に泥を塗ることになるのです。

◆山野草好きの人なら一株ほしくなるイワタバコ【イワタバコ科イワタバコ属】。

水が滴るような日陰の、岩肌のようなところを好むようです。花茎は10~15センチほど。葉の形がタバコに似ているからこの名がついたとか。

2011/06/09 龍渉



## 余滴

# につぼん人情小噺

## 第六十五話 包丁

三遊亭鳳豊

東日本大震災、大変でございます。

きつと大変に長い時間がかかると思いますが、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

いま、東京の築地市場も大変だそうですね。東北の魚が入って来ないものから、てんやわんやだそうでございますよ。この築地、移転問題が起こっておりますが、市場ができたのはそんな昔のことではないんですね。大正十二（一九二三）年の関東大震災の直後だそうですね。それまではどこにあつたかと申しますと、日本橋。いまの三越本店の近くの川沿い。川の兩岸にあつたので、魚市場のことを「河岸」と言うんだそうですね。じゃあ、なんで、日本橋に「河岸」ができたか。

これは、徳川家康公と大いに関係がございますまして、家康公というお方は大変な美食家で、特に、江戸入府以来、江戸の魚が大好物で、わざわざ摂津の国の佃村（現在の大阪府西成区佃）から漁師を呼び寄せまして、漁をさせたんだそうですね。將軍がじきじきに呼んでくれますから、みんなどんどん江戸へ参りまして、家を買います。簡単に買えたそうですねよ、イエヤスつていうくらいですから……。

で、彼らが住んだのが、佃から来たので、佃島と呼ばれたのでございます。

佃島の漁師たちは、魚を獲りましては、將軍に献上します。そのうち、「余った魚は売つてよいぞよ」ということで、日本橋河岸が選ばれたというわけです。

それにしても、家康公は、なぜ摂津の国からわざわざ漁師を江戸に呼んだのでしょうか。

これには逸話が残ってますね。

ある時、家康公が摂津の国の住吉神社に参拝することになったのですが、途中にある神崎川に舟が用意されていなかったために、家康公一行は川を渡れなかった。

その時に佃村の漁師たちが駆け付け、一行の川渡りを助けてくれた。この時の恩を忘れずに、家康公は江戸入府の際に、彼らと呼んだんですね。彼らも、恩を感じて、江戸の佃島に住吉神社の分社を建てたのが、いまも東京・佃に残っております。

いやいや、河岸の説明が長くなりました。今日は、貧しさに負けなかった板前さんのお話をいたしましょう。

東京の銀座に「しも田」という名の割烹がございまして、私の師匠の三遊亭鳳楽がお邪魔をいたしまして、毎月「銀座風流寄席」なんていう落語のあとにおいしい食事を召し上がる粋な落語会をさせていたでいてるんですね。このご主人、下田徹さんの若き日のお話でございます。

徹さんの実家は、静岡県の伊東の網元だつたそうですね。徹さんは六人きょうだいの四番目で、昭和十五年に生まれました。生まれた頃は、「タイ」変に景気がよく、漁のたびに若い漁師たちが十数人も「ハゼ」参じてまいりまして、かなり「ブリブリ」言わせてたようですよ。

ところが、戦後まもなく、家は没落。徹少年の新聞配達の給料三千円が家のコメ代という始末。お父さんはいえ、毎日一升瓶を抱えて、酒びたり。

♪酔つてくだまく父の声を、逃げて飛び出しゃ吹雪の夜道

伊東ですから、吹雪はありませんけど、少年の心は、わかりますよね。徹少年、中学に行きましても、新聞配達で家を助

けます。新聞配達をやっていたこともありません。足が速かつたのですが、陸上部から勧誘が来ても、入れません。なにしろ、練習する時間がなかつたのです。

高校進学の時、私立高校の陸上部から月謝を免除するから「うちの高校に来てくれ」という話をもらいますが、月謝だけ免除されても、家は楽になりません。家族会議の末、彼は高校を断念せざるを得なくなりました。

「どうせ、仕事をやるなら、食いつぶぐれのない商売がいい」と言われて、入ったのが銀座の割烹の下働き。そこで、早朝からの仕入れや仕込みの手伝い、昼は割烹で売つていた特別弁当の配達、弁当箱の回収と皿洗い、夜の準備から板場の手伝い。

それこそ、目の回るような毎日が続きます。それで、月給が二千円。地元で新聞配達が三千円なのに、なんと安いことか。それでも、徹ちゃん、坊主頭でがんばります。

東京に出て来たのですから、遊ぶところはいくらでもあるのですが、お金を使いません。なぜなら、なんとしても包丁がほしいからです。板前の世界は店の包丁などありません。みんな自分の包丁です。だから自分で大事に研いで、人まかせにしないのです。

ですから徹ちゃんも自分の包丁がほしい。持つていなければ、なんの修業もできないからです。

割烹に入つて三カ月目のことでございます。

ここまで一銭も使わなかつた二カ月分の給料四千円を持って、一流の包丁屋さんに行きました。これで修業ができる、と勇躍、店の前まで来ましたが、ふと、立ち止まってしまいました。

包丁の値段が四千三百円だつたからです。

三百円足りない。ということとは、もうひと月働かないと、包丁が手に入らないわけです。

家のことを考えたなら、一日も早く板前修業に入りたいのですが、こればかりはしかたがありません。

「どうしたんだい、坊や」

店の前で立ちつくしている坊主頭の少年に、店の主人が声をかけたのです。徹ちゃんは事情を説明しました。主人は、ニッコリ笑つてこう言いました。

「ああ、いいよ。立派な板前さんになるんだよ」

欲しいと思つた包丁を四千円で売つてくれました。そして、帰りに八百屋さんに寄りました。カツラ剥きを練習する大根がほしかつたのです。でも、もう、大根を買うお金がありません。すると、店の主人が一本くれました。

「いつでもおいで。売れない野菜ならいくらでも持つて行きな。がんばれよ」昔の人は、みんないい人だつた、と下田さんは話してくれました。

ふと見ると、下田さんの目には涙があふれて、いまにもこぼれ落ちそうでした。十五歳の少年が味わつた、私に話せない苦勞がまだまだあつたのでしよう。

MOKU6月号の転載です。

いつもの通り、師匠の暖かい眼差しが読み取れる内容で、読者の皆様が期待しているお気持ちに分かります。有難いことです。

お話しに出てくる「銀座しも田」を、インターネットで探したら、すぐに見付かりました。

『銀座風流寄席』は、毎月第三土曜日ということなので、一遍お邪魔したいなと思いましたが、場所が銀座では少々気後れしそうですね。

